

ものは語る 100年企業の “最古参”

創業100年以上の老舗企業で、現役で使われている最古の道具や機械を紹介。
物言わぬ“物”が、言葉を超えて今に伝える創業の理念・社風とは——？

「たとえ機械化されても
ここから始まったことを忘れない」

加藤景司氏・談 株式会社加藤製作所代表取締役社長

加藤製作所の原点は、曾祖父が「かじ幸」という屋号で始めた鍛冶屋です。当時から一年の仕事始めには、社長が剣を打って神様に奉納する。一つの儀式として、今も欠かさず続いています。私で四代目ですが、火箸も当時の物を大事に使っています。

今、日常の作業では、昔ながらの鍛冶屋スタイルで鉄を打つことはまずありません。機械化されて、あつという間に製品が造れる時代になった。でも、鉄を扱う原理は変わりません。熱する、叩く、返す、磨く……。この剣打ちにはすべての技術の原点が詰まっている。ここから始まったことを忘れないためにも、会社のトップが儀式を続けることに意味があるのだと思います。

我々は、モノ造りの会社です。鉄を通じて様々な製品を造る。我々の手足となるのは道具だし、それが発展して大きな機械になった。簡単に製品が造

れるようになった。でも、機械が勝手に造るわけじゃないんですね。いわば人と機械の合作です。

ならば機械を大切にするのは当然のこと。毎朝工場に入ると、出荷を待つ製品や機械、台車に「今日も頼んだよ」と声をかけます。車を運転する時も、「今日も一日お願いします」と一礼して乗り込みます。そのお陰か、不思議なほど故障が少なくなりました。

声をかけていると、ただの鉄の塊でも愛着がわいてくるし、いい物が生まれる。格好よく言えば魂が宿るんです。

我々が造るのは、車や飛行機の一部分など、人の命を預かるもの。魂を宿らせなきゃいけないし、また、宿っていると思わないと、いい製品はできません。目に見えない技術で勝負するしかない業種だけに、より心は大事です。物の命をいかに。魂をこめる。そういう仕事を指していきたいですね。

1年の最初の火は特別な方法でおこす。鉄の丸棒をハンマーで叩いた熱でマッチに火を爐し、火床（ほど）をつくる。



株式会社 加藤製作所
(岐阜県中津川市倫理法人会)

金属製品製造業。地元農家の鋤や鍬を作る鍛冶屋として明治21年創業。現在は家電や自動車、航空機部品など、多様なプレス加工を請け負う。土日祝をシルバー世代の社員が中心になって働く、日本の高齢者雇用企業としても知られる。



神棚には125年分の剣が祀られている。代々の社長によって、剣の形も微妙に違う(写真左)。

「仕事始め式」で使う火箸／加藤製作所

製造年：明治21年頃

用途：毎年1月2日、伝統的なスタイルの「仕事始め式」で、社長が神棚に奉納する剣を打つ際に使う鍛冶用の火箸。熱した帯鋼を火箸で掴んで、およそ半日かけて剣を打つ。

創業当時の125年前から使い続けている火箸には十種類ほどの大きさや形状があり、用途に応じて使い分ける。右は4代目の加藤景司社長。「初心を忘れないために、あえて昔からの道具を使う。1年の始まりにその年の思いを固めるようなつもりで鉄を打ちます。」

